

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2012

課題番号：24652097

研究課題名（和文）フレイジオロジーの理論化推進のための国際的研究

研究課題名（英文）International Research for Theorization of Phraseology

研究代表者

八木 克正（YAGI KATSUMASA）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：90099630

研究成果の概要（和文）：

1年間であったが、フレイジオロジー研究の理論化の方向に向かって一步前進することができた。2回にわたる研究会開催（1回は日本語で啓蒙的な目的をもって、後の1回は、英語による国際的な交流の目的をもって英語によって）とその準備をもって、活発な意見交換と研究成果を行った。そして、ポーランドの学者の提案によって、**Intercontinental Dialogue on Phraseology** プロジェクトを本格的な国際的組織とし、活動する方向が決まった。日本の代表は研究代表者の八木克正が就任する。

フレイジオロジーは、一般化しにくい語彙、コロケーション、イディオムを研究する学問である。私たちは欧州の研究者と共同でその研究を進めてきた。日本の英語学にフレイジオロジーの普及を、日本の英語教育をコミュニカティブに、という2点を旗印に、その転換期を創出できたと考える。

研究成果の概要（英文）：

During the past year, we made a big step forward in terms of theorizing phraseology through the two major conferences (September and March) supported by the Kakenhi and also through discussions among members of the Japan Society for Phraseology. We also joined the conference of EUROPEAN SOCIETY FOR PHRASEOLOGY held in Maribor, Slovenia in August, and had occasions to discuss how to theorize phraseology with European and Canadian phraseologists.

Phraseology is a research area of language focusing on vocabulary, collocations and idioms (among others) whose research is difficult to do under unified methodological and theoretical frameworks, but we think we have made a big breakthrough through the discussions with European and Canadian phraseologists. People who joined the two conferences held in Osaka in September and in Tokyo in March must have seen what phraseology is and what it is about. Phraseology will provide theoretical foundations to the communication-oriented English education in Japan, which we hope, will thrive in this country.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、英語学

キーワード：フレイジオロジー、コロケーション、イディオム、語彙、フレイジオロジーの理論化

1. 研究開始当初の背景

フレジオロジー(phraseology)研究は、この20年ほどの間に急速に欧州で盛んになった。その流れを作った大きな原因は、言語を文法中心に考え、単語と文法規則から捉える言語理論に対する反省がある。人が言語を使用する時、単語を文法規則で並べるという操作だけでは、その言語らしい発話を保証しない。また、実際の流れるような発話の生成を説明することはできない。言語使用の歴史の中で蓄積されてきた、語彙、成句、構文、イディオムなどレキシコン(理論上の辞書)項目の習得があってこそ流暢で、その言語らしい発話が可能になる。

言語理論とはすべての面で正反対の立場をとるフレジオロジーは、文法規則の役割を小さなものと捉え、それに対して、言語理論が避けてきたレキシコン項目の語彙、成句、イディオム、構文などのレキシコン項目の研究に取り組む(八木克正(2011)『英語の疑問新解決法 伝統文法と言語理論を統合して』(三省堂)参照)。この考え方は第一言語、第二言語習得のプロセスに共通しており、言語教育の理論とも整合する考え方である(八木克正・井上亜依(2008)「英語教育のためのphraseology(上)(下)」(『英語教育』5,6月号)を参照)。

しかし、そのフレジオロジー研究にも問題がないわけではない。それぞれの研究者は上記の基本的考え方を共有して具体的問題に取り組んでいるが、学者ごとに用語が異なり、理論的基礎も弱い。フレジオロジーは、生成文法などの演繹的理論展開とは異なり、個々の研究者が個別の現象から帰納的に理論化してきたので、研究全体を見渡す理論をもっているわけではない。私たちは、これまで、欧州各国を代表する研究者と交流し、対等の関係で研究成果をあげてきた。そして、平成23年までにその成果を2冊の論文集として出版した(書名は「研究計画・方法」で述べる)。そこに収録された論文を新たな出発点として総括し、平成25年3月には、国際シンポジウムを開催して、本格的な理論化の方向へ踏み出す必要性があった。

2. 研究の目的

1年でフレジオロジーの理論的基礎を明確にできるわけではないが、日本の伝統的な英語研究の方法(一般に語法研究と言われる)に新しい言語研究の見地と方法を加え、新たな理論的基礎の方向付けを目指す。八木克正(上掲書)はその具体的な提案を含んでいる。欧州の学者にもそれぞれの理論化の方向を出してもらって、共に新たな方向を見出してゆきたい。

私たちは、国内外の学会や研究会、招待講演などで、このフレジオロジーの視点を明

らかにしてきた(ここ3年間に3名で合計国際学会発表件数18、国内学会発表件数24、招待講演12、著書7、論文27)。国内の英語学者はほとんど異口同音に「文法の重要性」を唱える。その姿勢は根強く、英語教育の観点からも「文法重視」を大前提とする声が大きい(八木克正(上掲書)また、八木克正(2007)『世界に通用しない英語—あなたの教室英語、大丈夫?』開拓社)。

「文法中心」の考え方は、レキシコンの軽視、個別の現象の軽視へとつながる。しかし、私たちがみる限り、欧州の研究者は共通して、レキシコン重視、個別の現象の重視の方向へ動いている。日本の英語学と英語教育の世界にもその流れに沿うよう大きな変革をもたらしたい。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者、研究分担者それぞれ独自のフレジオロジー研究を進め、海外の研究動向を見極めながら、独自の理論化への方向を模索する。

(2) 平成24年7月にこれまでの研究を総括する研究会を開催し、研究代表者と研究分担者のこれまでの研究成果をシンポジウムの形式で確認する。

(3) 平成24年8月にスロベニアのマルボルで開催される欧州フレジオロジー学会に出席し、7月の成果をもとにそれぞれ研究報告を行い、欧州の研究者と交流をする。同時に、この学会に所属する欧州などの研究者2名を、9月に開催する日本フレジオロジー研究会に招聘する交渉を行う。

(4) 平成25年3月に国内で開催する国際学会での発表の準備をする。目標は報告者それぞれの今日までの研究成果の理論化である。欧州各国の研究者4名それぞれの研究報告も、フレジオロジーを如何に理論化するか、また、フレジオロジーの研究成果をどのように言語教育に活かすか、といった観点からの報告を求め、できるだけその発表までに大会予稿集の形で出版できるように準備を求める。

4. 研究成果

フレジオロジーは、一般化しにくい語彙、コロケーション、イディオムを研究する学問である。私たちは欧州の研究者と共同でその研究を進めてきた。その理由は、思想が日本の伝統的な実証的研究法と基本的に共通するからである。日本の英語学にフレジオロジーの普及を図り、英語教育をコミュニカティブ方向への転換点を創出するために、国際的な研究と意見交換の機会をもつことを目的に活動することであった。

平成24年7月に研究会を開催し、研究代表者と研究分担者のこれまでの研究成果を

シンポジウムの形式で確認した。平成 24 年 8 月にスロベニアのマルボルで開催される欧州フレイジオリジー学会に出席し、7 月の成果をもとに、3 名のうち井上と住吉はそれぞれの研究報告し、欧州の学者と意見交換を図った。また、八木は研究者と交流を図ると同時に、平成 25 年開催のシンポジウムの講師の交渉にもあたった。

それ以後も、3 名はそれぞれ国内外の学会・研究会で発表を行い、国内外の学者と研究成果の共有をはかった。この発表では、それぞれの問題意識に基づいて研究発表を行い、さまざまな研究者と意見交換をし、日本での研究方法と成果に自信を深めることができた。

このような成果をもとに、本年度の研究の締めくくりとして、平成 25 年 3 月 16 日に、早稲田大学の好意で、フレイジオリジー研究会の国際的シンポジウムを開催し、2 件の研究発表とともに、4 名の講師からなるシンポジウムを開催し、それぞれ違った立場からフレイジオリジー研究の理論化のための提案を行った。

大きな成果を得たが、この研究をさらに国際的なものにするために、Intercontinental Dialogue on Phraseology のプロジェクトを世界に広げ、まもなく刊行される論文集第 2 集に続いて、第 3 集の企画も、ポーランドのピアリストク大学のシェルツノビッチ氏を中心に企画中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 八木克正、What is phraseology about? What about phraseology? —イデオロムはどのようにして形成されるか— 『言語と文化』 (関西学院大学言語教育研究センター紀要)、査読無し、第 16 号、2013、1-16
- ② 八木克正、フレイジオリジーと実証性、『関西学院大学社会学部紀要』第 116 号、査読無し、第 116 号 2013、45-61
- ③ 磯辺ゆかり、L2 メンタルレキシコンにおける定型連鎖の心理的実在性について—音読データにもとづく考察—、*Language Education & Technology* 49、査読有、2012、121-141

[学会発表] (計 15 件)

- ① Yukari Isobe, “The Effects of Exposure Frequency on Productive and Receptive Knowledge of Multi-word Expressions,” American Association for Applied Linguistics (AAAL) Dallas 2013 Conference, Mar. 17, 2013, Sheraton

Dallas, Texas, U.S.

- ② Makoto Sumiyoshi, “Phrases shaping up!: Phraseology and language change,” The Seventh Conference of the Japan Society for Phraseology Mar.16,2013, Waseda University, Tokyo, Japan
- ③ Ai Inoue, “Phraseology in Contemporary English – Methodology and Analysis,” The Seventh Conference of the Japan Society for Phraseology, Mar. 16, 2013, Waseda University, Tokyo, Japan
- ④ Katsumasa Yagi, “The Assessment of Frozenness of ‘Content word + Preposition’ in English,” The Seventh Conference of the Japan Society for Phraseology. Mar. 16, 2013. Waseda University, Tokyo, Japan
- ⑤ 八木克正 「言葉の感性を高める語法の世界 - 微妙な意味の違いを見極める - (招待講演)」第 17 回言語教育談話会/第 5 回英語教育総合学会、2013 年 3 月 10 日、大阪大学
- ⑥ 住吉 誠 「現代英語の変化を考える— “please”-placed “to”-infinitives を題材に—」関西英語語法文法研究会第 25 回例会、2012 年 12 月 15 日、関西学院大学
- ⑦ 八木克正 「成句とコロケーション- 前置詞との関連から」関西英語語法文法研究会第 25 回例会 2012 年 12 月 15 日、関西学院大学
- ⑧ Makoto Sumiyoshi, “On account of” as a clause linkage marker,” 4th International Conference of English Language and Literature Studies: Embracing Edges (ELLSEE), Dec. 8, 2012, University of Belgrade, Belgrade, Serbia
- ⑨ 井上亜依 「新しいフレーズとその機能— 群前置詞 in and of と類似フレーズ」、日本英語コミュニケーション学会第 21 回年次大会、2012 年 10 月 13 日、大阪商業大学
- ⑩ Makoto Sumiyoshi, “Valency patterns in dictionaries,” Europhras 2012, Aug. 28, 2012 University of Maribor, Maribor, Slovenia
- ⑪ Ai Inoue, “A study of complex prepositions – “be on against” as an example,” European Society for Phraseology 2012 Maribor. Aug. 25, 2012. University of Maribor, Maribor, Slovenia
- ⑫ 井上亜依 「phraseology—過去・現在・展望」(招待講演) 大学英語教育学会辞書研究、2012 年 6 月 30 日、東洋大学
- ⑬ 八木克正 「「そうだったのか」と思わせる英語の授業のために」(招待講演) 愛知県私学協会教科等研究部英語部会 2012 年 6 月 29 日、桜花学園高等学校

⑭ 八木克正、「英語学研究の方法と実際—主語名詞の種類と補語の形式との関係を例に— (招待講演)」関西外国語大学大学院院生研究会第 67 回研究発表会 2012 年 6 月 23 日、関西外国語大学

⑮ 八木克正「変わりゆく英語 —変化に対応する英語教育のために」(招待講演) 福井県英語研究会、2012 年 6 月 15 日、福井国際交流会館

[図書] (4 件)

① Ai Inoue, Makoto Sumiyoshi (分担執筆) Schneider Verlag Hohengehren GmbH, *Phraseology and Discourse: Cross Linguistic and Corpus-based Approach* 未刊.

② Ai Inoue, Makoto Sumiyoshi (分担執筆) *Intercontinental Dialogue on Phraseology*, Vol. 2, University of Bialystok Publishing House. 未刊.

③ Makoto Sumiyoshi (分担執筆) 開拓社, *Kyoto Working Papers in English and General Linguistics* 2, 2013, 233-247

④ 八木克正、井上亜依、Makoto Sumiyoshi (分担執筆) 開拓社、『21 世紀英語研究の諸相』2012, 2-17, 356-378, 379-397

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八木 克正 (YAGI KATSUMASA)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90099630

(2) 研究分担者

住吉 誠 (SUMIYOSHI MAKOTO)
摂南大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10441106

井上 亜依 (INOUE AI)
防衛大学校・総合教育学群・外国語学教室・
准教授
研究者番号：70441889

(3) 研究協力者

磯辺 ゆかり (ISOBE YUKARI)
関西学院大学・言語コミュニケーション文化
研究科・研究員
研究者番号：なし